

市立貝塚病院

乳がんにアタックする市立貝塚病院 乳がん高度検診・治療センター

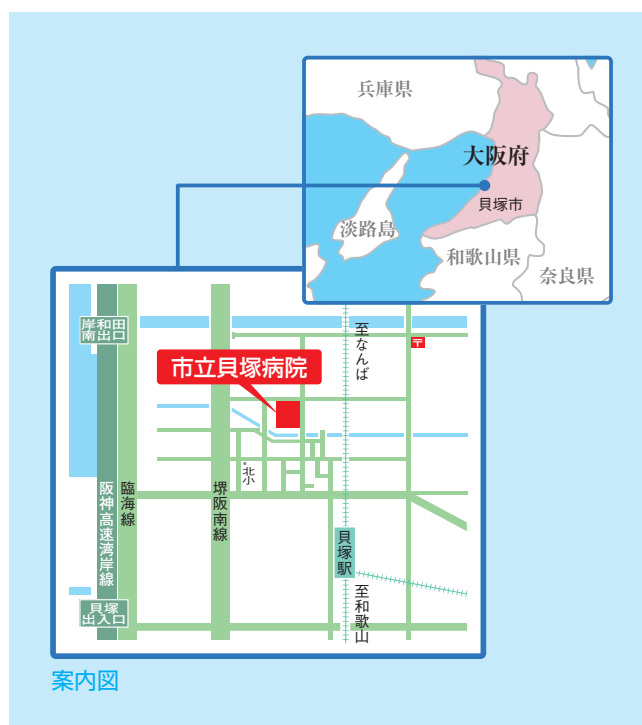
編集委員 小田 和幸



市立貝塚病院 外観

貝塚市は大阪湾の東岸、和泉平野の中央にあり、大阪府の都心と和歌山市とのちょうど中間に位置した人口約9万人の中堅商工業都市です。関西空港からは電車で10数分という距離のため、交通・物流の観点からも今後、商工業のますますの発展が望めます。

今回訪問した市立貝塚病院 乳がん高度検診・治療センターは、近年盛んになったピンクリボン活動などで注目を浴びている乳がん検診と治療を専門に扱う施設です。乳がんは仕事や子育てなど最も働き盛りの30歳代から罹患率が増加し、40歳代後半にピークを持つ恐ろしい病気です。この乳がんに関心を持って取り組んでいる当院について、貝塚市病院事業管理者で大阪大学名誉教授の小塚隆弘先生、センター長兼外科部長の西敏夫先生、副センター長兼放射線科部長の沢井ユカ先生にお話しをお聞きしました。



案内図

はじめに小塚先生にお聞きしました。

○ バレーボールの町 貝塚市

小田：貝塚市には、やはり貝塚などの遺跡があるのでしょうか。

小塚先生：みなさん、そう思われているようですが、残念ながら貝塚は見つかっていないのです。でも、「ニチボー貝塚」のある町と言えば、みなさんおわかりいただけるかと思いきや、45歳以上の人しかわからない。がっかりです。

小田：東京オリンピックで金メダルを獲得した「東洋の魔女」として有名な、あのニチボー貝塚のある町だったのですね。試合を白黒テレビで見た記憶があります。

小塚先生：お年がわかりますね。すでにニチボーの社名変更後のユニチカは貝塚市から撤退しましたが、日本女子バレー発祥の地としてナショナルトレーニングセンターがあります。女子バレー育成のため、全国から有望な中学生を集めています。生徒たちはバレーを練習しながら、地元の中学校に通っています。さらに、日本代表チームがオリンピックや世界選手権に旅立つ際には壮行会なども行われています。

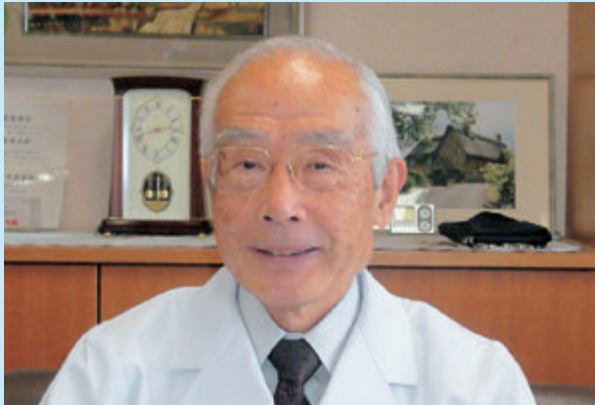
○ チームワークのよい市立貝塚病院

小田：貝塚病院の理念に、「歓の医療、和の医療、技の医療」とありますが、和の医療を掲げられた理由をお聞かせください。

小塚先生：私は、医療はある意味ではサービス産業と考えています。患者様の病気を治すだけでなく、いかに満足して退院していただけるか、までを考える時代です。当院はチームワークがよく、業務の受け渡しもスムーズに行われています。最近、小児科救急への対応が問題視されていますが、この地域では近隣市町村で輪番制を取り、うまく運用しています。

小田：病院内から近隣地域までの和を実践されており、住民にとってはたいへん心強いことですね。ところで、貝塚病院は日本医療機能評価機構の認定を平成14年に取得されています。認定を取得されるのはたいへんだったのではないのでしょうか。

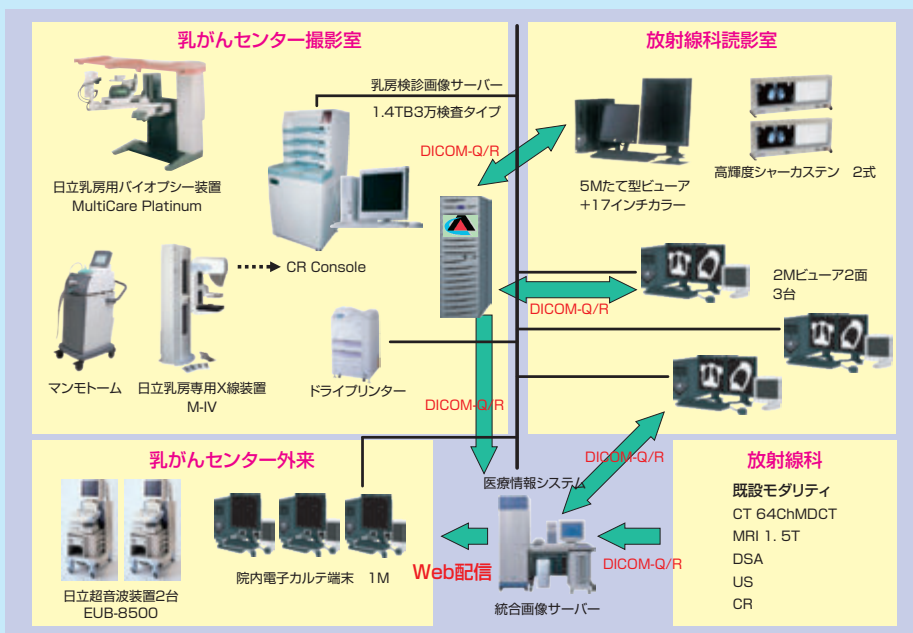
小塚先生：私が当院に赴任してきたとき、すでにかなり質のよい病院でした。この高いレベルを維持し、さらに発展させるために認定を受けた方がよいのではないかと思います。



貝塚市病院事業管理者
大阪大学名誉教授 小塚 隆弘 先生



エントランスホール



乳がん高度検診・治療センターのデジタルマンモグラフィ検診システム構成

周囲の人の中には、「そこまで必要ないのでは」という意見もありましたが、申請することにしました。申請してものんびり構えている人が多かったのですが、一回の審査で認定を得ることができました。

小田：もともと、しっかりした体制が構築できていて、特別な対応の必要がなかったということですね。

○ 乳がん高度検診・治療センター設立の背景

小田：乳がん検診から治療までを専門に扱う施設を附属施設として持つ公的病院はあまりないと思います。設立の背景についてお聞かせください。

小塚先生：私の身近に、若くして乳がんで亡くなった方がいらっしゃいました。乳がんは早期発見により必ず治る病気であるにもかかわらず、がん宣告が怖くて診断を受けず手遅れになったケースもあります。乳がんという病気は、進行すると骨など全身へ転移する頻度が高く、長期にわたって精神的・肉体的苦痛を伴うのです。一方、欧米では、乳がん罹患率は増えていますが、死亡率は減少しています。日本では、両方ともに増えています。自己触診や市民検診で早期発見・早期治療できるにもかかわらず、たいへん残念なことです。

小田：厚労省統計でも、2000年度調査では女性のがん罹患率は第1位ですが、死亡率は第5位、5年生存率(1993～1995年)は第1位でした。まさに、小塚先生のおっしゃるとおりのデータです。一方、乳がん検診の受診率(2006年度)を見ますと、全国平均11.3%、マンモグラフィ併用4.6%です。その中で、大阪については受診率7.6%、マンモグラフィ併用1.0%とかなり低いレベルです。

小塚先生：受診率が低いのは行政の熱意が弱かったことも一因です。当施設は、がん対策に関する政府方針、大阪府の資金援助や貝塚市長の想いから、大阪府南部地域を対象に乳がん死亡率減少を目標として大阪府から認定を受けて開設しました。また、さきほど医療はサービス産業の側面もあると申しましたが、公的施設といえども、他にはない特色のある施設でないといくれば残れないと思います。この病院では、彌生恵司先生、西敏夫先生といった著名な乳腺外科医や、乳がんの画像診断を専門とする沢井ユカ先生、また乳房

撮影Aクラス認定の放射線技師さんなどがいる利点を活かさない手はありません。

次に、西センター長と沢井副センター長にお話を伺いました。

○ 乳がん高度検診・治療センターの特長について

小田：さきほど、乳がん高度検診・治療センター設立の背景について小塚先生からお話をいただきましたが、当センターの特長を具体的にお聞かせください。

西先生：乳がん検診だけでなく、早期発見・早期治療まで積極的に取り組んでいくことを目指した施設として、最新の機器とレベルの高いスタッフを確保していることです。機器については、CRによるデジタルマンモグラフィ装置、エラストグラフィを搭載した超音波装置のほか、超音波ガイド下マンモトーム^{*1}とX線ステレオガイド下マンモトーム装置があります。特に、エラストグラフィは最新技術により組織の硬さを検出し画像化することができ、腫瘍の良性/悪性判定の確度を高めるのに有用です。早く保険適用されることを望んでいます。このほか、赤外カメラ観察装置(PDE)と外来化学療法室があります。PDEはセンチネルリンパ節を的確に同定するために有用です。普通は色素法という手法で確認するのですが、この方法ではリンパ節をチェックするのに大きく切開しなければならず、精度もやや低くなります。ところが、PDEを使用すると、色素を注入した後、リアルタイムで色素の流れる様子を追うことができるため、迅速・的確、かつ小さい切開で手術することができます。また、外来化学療法室は専任の看護師と薬剤師を置き、常時、化学療法に対応できます。フルリクライニングするチェアと個別のテレビを装備しているため、長時間に及ぶ治療に対してもリラックスして受けることができます。

沢井先生：さらに、スタッフはマンモグラフィの読影医・撮影技師がAクラスの認定を受けています。施設としても、日本乳癌学会認定施設とマンモグラフィ検診精度管理中央委員会のマンモグラフィ検診施設画像Aクラス認定を取得しています。これらがすべて揃った施設はあまりありません。

西先生：治療については、標準治療を実施しています。医師



乳がん高度検診・
治療センター
副センター長
兼放射線科部長
沢井 ユカ 先生

装置：
乳房X線撮影装置
M-IV



乳がん高度検診・
治療センター
センター長
兼外科部長
西 敏夫 先生

装置：
超音波診断装置
EUB-8500

の個人的な判断によらず、国際的な学会でエビデンスを得られた手法で確実な治療を施すものです。また、地域の皆さんへ「がんの早期発見・早期治療」の普及活動の一環として、看護部が中心となりキャラバン隊を組織し、「乳がん自己検診法」を出前指導することも無料で実施しています。

○ 将来への展望

小田：乳がん高度検診・治療センターは平成18年4月に開設され、それほど時間がたっていませんが、将来へ向けた展望をお聞かせください。

沢井先生：もっと規模を拡大したいと思います。現在、1次受診者は2ヶ月待ちの状況です。さらに機器を導入するとともにスタッフのマンパワーも増やしたいと思います。

西先生：それから、当院でさまざまな研修や教育なども行えるようにしたいと思っています。

○ メーカーへ望むこと

小田：最後に、われわれ画像診断機器メーカーに望まれることがありましたらお話しください。

西先生：超音波装置はかなり画質がよくなっており、マンモトームを行う必要がないケースが増えています。ただ、どうしても機器のトラブルは避けられないので、万一の場合に迅速に対応していただけるようにお願いします。幸い日立の大阪

のサービスマンは対応がよく、感謝しています。

沢井先生：マンモグラフィ装置は見かけがごつい感じがします。女性を対象にした装置なので、検査の緊張感を和らげる意味でも見た目にもやさしい装置としていただきたいと思います。

貝塚市は「希望のトス、未来にアタック、貝塚市」というキャッチフレーズの下、日本女子バレーの聖地として、明日の日本代表メンバーを育成しています。今回訪問させていただいた乳がん高度検診・治療センターは、最高レベルの医療技術と熱い想いを持つスタッフの皆さんがチームワークよく、さまざまな最新機器を駆使して乳がんにあタックしています。貝塚病院が、乳がん撲滅の聖地となるのではないかと強く思いました。

ご多忙の中、多くの時間を割いていただき、貴重なお話を聞かせてくださりましてありがとうございます。今後の市立貝塚病院と皆様のますますのご発展を祈念しております。

※1 マンモトームはジョンソン・エンド・ジョンソン(株)の登録商標です。
※2 MultiCareはトレックス・メディカル・コーポレイションの登録商標です。



小林 直樹 技師(左) 矢竹 秀稔 技師(右)
装置：乳腺用バイオプシー装置 MultiCare^{®2} Platinum



乳がん高度検診・治療センター スタッフの皆さん



外来化学療法室



日本乳癌学会の認定施設証(左)
マンモグラフィ検診精度管理中央委員会の資格認定証(右)